

読む力を育成する小学校国語科授業実践

－ 流暢性指導を中心にした音読活動 －

学籍番号 179968

氏名 上田賢士郎

主指導教員 庭山和貴

1. 背景

本実践研究を実施した実習校において、読む力を育成することが求められている。文部科学省（2004）のこれから求められる国語力を構成する要素として、読む力の必要性が提言されている。その力を育成するために、文部科学省（2009）では、音読が効果的であると述べている。また、川島（2005）は、ありとあらゆる人間の活動の中で、最も脳を活性化している学習は音読である。音読するとものごとを考えると働く前頭前野が活発に働くと述べている。海津（2008）は、「流暢性の獲得によって、スムーズに文字を音に変換することができるようになり、読解に使うエネルギーを最大限残すことができる」と述べており、音読においても流暢性は効果的であると仮説を立てた。本実践研究において、音読をより効果的に行うために流暢性指導に着目し、野田・松見（2009）の研究をもとに、タイムトライアルを音読活動に応用して取り入れた。

2. 実践研究

2.1 実践研究 I

実践研究 I では、物語文における読む力を育成することを目指して、タイムトライアルによる流暢性指導と、会話文を工夫して音読する表現力指導を学習指導の工夫を行った。授業前後の音読テストに対して行った第 3 者評価の結果は、音読の流暢性と音読の表現力が有意に上昇しており、物語文における読む力を育成することができたことを示唆する。しかし、授業前後に行った音読テストで、同じ教材を使ったため、音読テストの初読条件による比較ができなかったことが課題として残った。また、読解力との関連を調べることができなかったため、読解力を測るテストの作成が求められた。

2.2 実践研究Ⅱ

実践研究Ⅱでは、タイムトライアルによる流暢性指導と、Newspaper in Education (NIE)における新聞を活用した学習指導の工夫で、説明文における読む力の育成を目指した。授業前後の音読テストと読解力を測るテストに対して行った第3者評価の結果、見出しの作成問題において、第3者評価による評定値が有意に上昇していた。この結果は、説明文における読む力を育成することができたことを示唆する。また、初読条件による授業前後の音読テストの比較から、30秒で音読できた文字数が有意に上昇したことから、初読の条件においても、流暢性指導は効果があったことがいえる。しかし、音読の流暢性と読解力について、対象児童が少なく、相関関係に有意な差は見られなかった。

2.3 実践研究Ⅲ

実践研究Ⅲでは、フィードバックシートを活用した音読活動を取り入れた学習指導の工夫で、古文における読む力の育成を目指した。授業前後の音読テストの結果から、音読にかかった時間と誤反応数の減少に有意な差が見られた。また、表現力として示した5つの観点を取り入れた古文における読む力も有意に上昇していた。この結果は古文における読む力を育成することができたことを示唆する。また、アンケート調査から、学習者同士の他者評価として取り入れたフィードバックシートを活用した音読に対して大半が肯定的な意見を持った。しかし、流暢性指導による音読活動でついた力の保持を調べることができなかつたため、読む力の継続的な効果を測ることができなかつたことが課題として残った。

3. 総合考察

本実践研究は、流暢性指導を中心にした音読活動を取り入れた授業実践を行い、児童の読む力を育成することを目的とした。3つの実践研究の結果、物語文・説明文・古文における読む力を育成することができ、流暢性指導を取り入れた学習指導の工夫が効果的であることが示された。また、他者評価によるフィードバックとして、フィードバックシートを活用した音読活動の有効性について、アンケート調査から明らかとなった。

しかしその一方で、音読の流暢性についてと読む力の相関関係を示すことはできなかつた。対象児童数が少なかつたため、有意な差はみられなかつたが課題であるため、今後も継続して調査を続け、相関関係をみとっていきたい。

これらの研究結果から、タイムトライアルによる流暢性指導は効果があったことがいえる。また、音読の流暢性と読む力についての散布図を見てみると、対象児童数が少なかつたため、有意な差は見られなかつたが、音読の流暢性と読む力について相関関係がある傾向が見られた。よって、普段の国語教育において流暢性指導を取り入れていくことは子どもの読む力の向上の助けになる。そして、これと同時に、読解力との関連性を明確にしていくことが必要であるといえる。